

吉田松陰の思想と弟子たちによるその実現

— 150周年のいま思想の時代として明治維新を考える —

関西学院大学経済学部 原田ゼミ3回生（第4期生）
深見樹・梶田将暉・山下舜介・小林和佳・原田健太
2018年11/10 関西学院大学経済学部 インゼミ大会にて

はじめに

序章 吉田松陰自身の思想

第1節 天皇中心の日本という観念による西欧列強への対決

第2節 天皇の下での平等という観念をベースにした革命的な倒幕運動の思想

第3節 軍事・兵器を中心とした、欧米の優れた技術の移入

第1章 木戸・山県・高杉・久坂・富永による西洋列強への対決と倒幕運動

第1節 西洋列強への対決

第2節 討幕運動

第2章 新政権形成期と維新後での木戸・伊藤・山県の業績とそこでの松陰思想の実現

第1節 木戸（1877年没）の業績と松陰思想の実現

1. 木戸の業績

2. 木戸の各業績に見られる松陰思想の実現

第2節 伊藤（1909年没）の業績と松陰思想の実現

1. 伊藤の業績

2. 伊藤の各業績に見られる松陰思想の実現

第3節 山県（1922年没）の業績と松陰思想の実現

1. 山県の業績

2. 山県の業績に見られる松陰思想の実現

結 論——松陰思想の何が実現されたのか？ その成果と危険性は？

補 論 幕末・明治維新期の女性たち

1. 幾松

2. 広岡浅子

3. 津田梅子

まとめ

はじめに

現在、私たちの生活は、すべて技術・テクノロジーが先行して移り変わっていくかのようなのである。インターネットがますます重要になり、携帯・スマホが何度も新しくなっていき、SNS を使いこなせないとコミュニケーションが不自由にまでなっていく現在、それらに乗り遅れないようにすることのみが社会の進化を担うかのようなのである。すなわち「道具」の発達による社会進化である。しかし、歴史を振り返ると、たとえばフランス革命やロシア革命のように、理想・思想つまり「内容」によって旧社会が変革され、新しい社会を作っていくという場面が多々あった。どちらの面も社会進歩を意味するはずであるが、いま前者があまりにも強くなりすぎていないか？

こうした問題に向かい合うとき、では私たちの日本では、それとは反対に思想が社会を、また国家・経済を作ったときはあったのか？ あったとすれば、いつどのようにか？ とまず逆の極端を明らかにして、そこから現在を考えてみることは有益であろう。そこで、こうした問題関心もちつつ、明治維新 150 周年として近現代の日本を総括すべきこの 2018 年に、吉田松陰 (1830～59 年) の思想と弟子たちによるその実現というプロセスを明らかにしたい。松陰は「日本社会の変革を先取りして」「封建割拠体制を超克して天皇を中心とする統一国家の構想」を提示したのであり、「近代日本は、この構想の方向に向かって (ただし松陰がこの構想に託した意味を多少とも変更しながら)、展開していく過程であった」¹。しかし彼自身は 29 歳で短い生涯を終え²、弟子たちがその思想を継承したのであり、彼らがそれでもって明治維新に大きく貢献したからである。

以下、まず吉田松陰の思想それ自体を 3 点において明らかにし、その後、富永有隣 (1821 年～1900 年)、木戸孝允 (1833～77 年)、山県有朋 (1838～1922 年)、高杉晋作 (1839～67 年)、久坂玄瑞 (1840～64 年)、伊藤博文 (1841～1909 年) といった弟子たちが松陰の思想のそれぞれの部分をどのように担い、現実化していったのか、またその「意味を多少とも変更」したり、周辺諸国への拡張へと進んでいったのはどうであったか、見ていきたい。弟子たちの活動は大きく分けて、無謀な「攘夷」の時期と討幕の時期、さらに体制構築の時期にわたっていた、と言えるであろう。それとの関連で、弟子たちは、①久坂玄瑞のように幕末維新の変革に挺身し、獄死、戦死、過労のあまりに早死にを遂げる者、②伊藤博文のように明治政府内部で昇進していった者、さらには、③富永有隣のように幕末から明治にかけての流れに振り落とされた者、という 3 通りに分けることができる³。ただし、そのプロセスがあまりにも男性中心であることに当惑する私たちは、さらに補論として、明治維新期の代表的な女性たちの生きざまを、幾松 (木戸松子、1843～86 年)・広岡浅子 (1849～1919 年)・津田梅子 (1864～1948 年) という順に見ていき、追加的に考察したい。

¹ 高橋『吉田松陰』p. 4。

² 当時の教え年では 30 歳。高橋『吉田松陰』p. 232-242 参照。

³ 野口『幕末明治』p. 190-191, 203 参照。

序 章 吉田松陰自身の思想

第1節 天皇中心の日本という観念による西欧列強への対決

長州藩の下士の杉家に1830年（文政13年）に生まれた吉田松陰は、父の弟で山鹿流兵学師範の吉田大助の養子として、幼い頃から兵学者としての精神を形成していく。兵学は敵に勝つための戦略論・戦術論の学問であり、武士社会の本質であった。これは自己の外部に敵を意識する武士的精神であり、松陰における他者・社会に対する調和的な態度と矛盾する面を持つ。松陰が意識していたのは、日本国家防衛のため・天皇への忠義においての西洋列強への敵意である⁴。

ペリー来航の際に、日米交渉において一方的に押し切られ、ペリー艦隊の脅威におびえ騒ぐ江戸の状況やアメリカの横暴な行動によって、天皇を上置く日本の独自の国柄である「国体」が失われたと慨嘆している。松陰はこれを幕府や藩を越える日本全体の問題ととらえ、軍事力の貧弱だけでなく、その根本的原因として政治の無力さと政治を支える理念の不在にみた。これによって松陰は国体の概念のもとに全体としての日本国家の形成の必要性を意識していた⁵。国家が一体となって防備を固めないと、百戦錬磨のアメリカに対抗することは困難であると考えていた。

今謹んで按ずるに、来春迄僅かに五六月の間なれば、此の際に乘じ嘗膽坐薪の思をなし、君臣上下一體と成りて備をなすに非ずんば、我が太平連綿の餘を以て彼の百鍊千磨の夷と戦ふこと難かるべし。若し然らずして安然日を渉る時は、追うべからざるの悔に及ぶべくと、竊かに國家の爲め痛心し奉るなり。故に忌諱を憚らず、盲言の罪を避けず、當今の急務條を論列するなり。⁶

松陰の考える国の在り方は、「日本の臣民すべてを天皇の臣下とするものであるが、天皇と臣民の直接の君臣関係は想定していない。彼は、幕府と諸藩による分割・割拠の体制を温存しながら、この体制の頂点に天皇を位置づけることで、天皇へのすべての忠義を媒介として、幕府を中心に諸藩が結集することで、天皇を支えて国土防衛に向かう国家体制を構想している。」⁷

また、国柄や国風を指す「国体」という今までにない概念を見出し、それは他の国にもある普遍的なものであるという考え方もあったが、松陰の「国体」思想は「日本だけ」を特別視する

⁴ 高橋『吉田松陰』p. 25-26 参照。

⁵ 高橋『吉田松陰』p. 50 参照。

⁶ 吉田『將及私言』p. 11-12。ここでは松本編『日本の名著』31, p. 200 での、次の現代訳を参考にした。「いま一度真剣に考えてみると、来春までにはもう五、六か月間しかない。ここで臥薪嘗胆、君臣上下一體となって防備を固めないと、現状のような長い太平への慣れのままで、あの百戦錬磨のアメリカと戦うことは困難である。もしもこのままで日を送ったときには、とり返しのない悔いを残すだろうと、ひそかに私は国家のために心を痛めているのだ。」

⁷ 高橋『吉田松陰』p. 52。

ものとして明治維新以後の大日本帝国を支える思考となった。

松陰は日本が対外的に力を持ち、天皇統治のもと対外膨張をすることで光輝を得るとした。また、国力増強のための学問を取り入れるため、外国の進んだ知識を吸収する学校を構想する。松陰は自己を皇国に生まれ育ち「皇恩」を受けた「皇恩の民」とし、皇恩に報じ皇国に忠義を尽くす存在と位置付けた⁸。

松陰が示したエートスは、「日本列島に生きる全ての人々を天皇の臣民たり得る存在として倫理的に等質性をもつものとし」⁹、「日本国家は、天皇統治を核心とするところに独自性と尊厳性をもつものであり、その尊厳性は国際社会に雄飛することでより充実し、臣民としての自己はこの海外雄飛の使命を担う存在であるというのである。このとき臣民の自己は、光輝ある国家と一体化することにおいて、自己確信を得る。絶対的な国家に従属することで絶対性の自覚をもつ」¹⁰というものである。

天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず。故に天下の丙何れにても外夷の侮りを受けば、幕府は固より當に天下の諸侯を率いて天下の恥辱を清ぐべく。以て天朝の宸襟を慰め奉るべし。是の時に方り、普天率土の人、如何で力を盡さざるべけんや。尚ほ何ぞ本國他國を撰ぶに暇あらんや。¹¹

第2節 天皇の下での平等という観念をベースにした革命的な倒幕運動の思想

松陰は1854年（嘉永7年）、下田でペリーの艦隊に密航するが、これは鎖国体制の幕府の禁令を破るものであったから、その違法性を知りながらも政策に対する批判的意見を行動に表現したのである。彼は為政者の政策に自明の権威的命令として服従するのではなく、自己の意見を対置し主体的に行動したのである¹²。

松陰の思想のベースには常に平等があった。彼は身分にかかわらず、武士的徳操を倫理的卓越性とし、それをあらゆる人間が実現可能なこととして、それを実現しようとする限りで身分性を相対化する。松陰はあらゆる人間が武士的徳操の実現可能性を持つ点で、倫理的等質性を認める

⁸ 高橋『吉田松陰』p. 82-86 参照。

⁹ 高橋『吉田松陰』p. 228。

¹⁰ 高橋『吉田松陰』p. 228。

¹¹ 吉田「將及私言」p. 12。ここでは松本編『日本の名著』31, p. 201 での、次の現代訳を参考にした。「天下は天朝の転化であって、すなわち天下の天下というべきである。決して幕府の私有ではない。だから、天下のうちどこであろうと、もしも外夷の侮りを受けたならば、当然幕府は天下の諸侯を率いて、天下の恥辱をそそぎ、もって天皇のおこころを慰め奉らねばならない。そのときこそ、この国全体のすべての人が力を尽すべきであって、自分の藩だ他人の藩だなどといった場合ではないのである。」

¹² 高橋『吉田松陰』p. 75-76 参照。

のである。彼の開いていた松下村塾でも塾生皆が身分にかかわらず平等に扱われていた¹³。

松陰は国家的危機を克服する主体は「在官在禄」ではなく、食禄をもたない在野の志士である「草莽」と位置づけ、松陰自身はその行動主体とし、多くの「草莽」が立ち上がり天皇への忠義を果たすことが日本国家存立に繋がると考えた。これを「草莽崛起」という¹⁴。彼は、「自らを草莽と自覚する中で、なお幕府と諸藩の政治主体としての意義を認めながらも、組織に属さない草莽を皇国の臣民として国家的危機を打開する担い手として、積極的に位置づける。」¹⁵この思想のもとでは天皇の意思という大義を必要とするのである。このように、松陰は天皇の下での平等、全ての国民が皇国の臣民であるという思想のもと、倒幕運動や革命的な行動を行っていった¹⁶。

第3節 軍事・兵器を中心とした、欧米の優れた技術の移入

松陰は西洋兵学の導入に積極的であった。軍事面において西洋流の武器・器械の優越は明白であるから、西洋列強に対抗するためにはそれらを導入することが必要だと考えた。松陰は攘夷の主張と西洋との交流、つまり攘夷と開国は矛盾しないという柔軟な考えを持っていた。ペリーのような国家としての名誉を損ずる仕方での外国の干渉は断固拒絶するが、独立した国家として名誉をもって存在するためには、西洋の兵器・兵学を学ばなければならないとした¹⁷。

西洋法に至りては、常に是れを實戦に施す故に、一門砲一口銃の論、其の精妙を極むるのみならず、戦をなすの大術に至りて、大いに然らざること能はざるものあり。故に大砲小銃共に西洋の器械節制に倣ひ、日々操演をなすべし。¹⁸

西洋兵学について学ぶためには、原書による蘭学研究が必要だと考えた松陰は直接西洋に行く必要性を感じる。そして海外渡航への決心を固める。この決心が後の下田密航事件につながるが、

¹³ 高橋『吉田松陰』p. 120-122 参照。長門国大津郡向津具上村川尻の山王社宮番幸吉の妻登波の一件。登波は、自分の父と妹と弟の3人を殺害し、夫幸吉に重傷を負わせて逃亡した、妹の夫を敵として諸国を探索すること足かけ12年、所在をつかんで藩政府に敵討ちの許可を求めたが、許可を得られなかった。藩政府の役人がその敵を探し当てて捕縛しようとしたところ自殺してしまい、登波が斬罪に処せられたその死骸のさらし首に短刀で立ち向かったのは、事件発生後丸20年経ったときである。松陰は敵討ちという武士の理想的な行動を登波に見て共感し、その倫理的卓越性の故に身分的秩序を相対化する。吉田「討賊始末」p. 177-178, p. 214-217 参照。

¹⁴ 高橋『吉田松陰』p. 182 参照。

¹⁵ 高橋『吉田松陰』p. 155。

¹⁶ 高橋『吉田松陰』p. 154-155。

¹⁷ 高橋『吉田松陰』p. 53 参照。

¹⁸ 吉田「將及私言」p16。ここでは松本編『日本の名著』31, p. 204 での、次の現代訳を参考にした。「西洋の法は、つねにこれを実践に用いているから、一門の砲、一門の銃の説でも、それは精妙を極めていく。のみならず、その戦を進める大術に至っては、まことにそのとおり（西洋流）でなければならないと思われる。だから、大砲・小銃ともども西洋の砲銃を用い、隊の編成も西洋にならって、毎日訓練すべきである。」

これは結局ポーハタン号に乗り込んだものの、ペリー艦隊の首席通訳官ウィリアムスに拒まれ失敗に終わる。国法を破ってしまった松陰は投獄される¹⁹。

さて、その後であるが、松陰は1854年（嘉永7年）、士分向けの獄舎である野山獄へ入れられる。ここでは自ら学問に励むとともに、同囚たちにも講義を行い彼らを教化していく。1855年（安政2年）に出獄を許され杉家に幽閉処分となる。1857年（安政4年）に叔父が主催していた松下村塾の名を引き継ぎ、杉家の敷地に松下村塾を開講する。この塾では松陰は久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山県有朋など後に名を馳せる人物を教育し、松陰の思想は彼らへと受け継がれていく²⁰。松陰はその後も幕府を批判し倒幕を持ちかけるなど、その思想が危険視され、再度野山獄へと幽囚される。1859年（安政6年）、伝馬町牢屋敷にて斬首刑に処された。

第1章 木戸・山県・高杉・久坂・富永による西洋列強への対決と倒幕運動

第1節 西洋列強への対決

1853年の黒船来航をさかいに日本では尊王攘夷運動が盛んになった。その中でも長州藩では尊王攘夷思想が活発に展開され、その元になったのが吉田松陰の思想である。木戸は1833年（天保4年）に萩の藩医の和田昌景の子として生まれ、8歳のときに近所の桂家の養子になった。桂が17歳のとき明倫館で松陰と知り合った。山県は1839年（天保9年）に長州藩蔵元附中間という足軽より低い身分に生まれる。尊王攘夷派の影響を受け、久坂の紹介で松下村塾に入り、松陰と出会う。高杉は1839年（天保10年）に長州藩の名門である高杉家の長男として萩城下に生まれた。最初は藩校である明倫館に入るが、その後、久坂の紹介で松下村塾に入った。久坂と並び高杉は松下村塾の双壁と呼ばれた。久坂は1840年（天保11年）に藩医の久坂良迪の次男として生まれる。久坂が14歳のころに父、兄と立て続けに亡くし、家督を継ぐことになった。その後松下村塾に入り松陰から学んだ。早くに家族を亡くしてしまった久坂は松陰の妹文と結婚した。彼らと少し違ったタイプの富永は、すでに1821年（文政4年）に萩に生まれている。明倫館で学んでいたが性格上の面で同僚・親戚の反感を受け、獄中生活を送っていた。野山獄で松陰と出会い、出獄後も松下村塾に招かれた。

さて、長州藩の彼らは最初、情熱的に攘夷運動を推進する。とはいえ、1864年のイギリス・アメリカ・フランス・オランダによる四国連合艦隊の攻撃を受け、攘夷は不可能であることを知り、その後は西欧の武器を取り入れる方向へと転換していった²¹。

彼らの中で若手の久坂は、とくに急進的に尊王攘夷運動へと走った。1863年（文久3年）に

¹⁹ 高橋『吉田松陰』p. 55 参照。

²⁰ 高橋『吉田松陰』p. 111-122 参照。

²¹ 青山『高杉晋作と奇兵隊』p. 6 参照。

建設中のイギリス公使館を襲撃して全焼させた「イギリス公使焼き討ち事件」に久坂は高杉や伊藤らとともに加わった。さらに、1864年（元治1年）の「蛤御門の変」（禁門の変）では、京都への進行を——高杉の自重にも関わらず——強く唱えていた久坂は、尊皇攘夷派の幹部として勇敢に戦い負傷し、自刃して、わずか23年の生涯を終えた。なお、この「蛤御門の変」で彼ら長州軍は、御所を警護する会津藩・薩摩藩などと戦い、それらとの対立を深めた²²。

木戸は黒船の来航に際して、当時励んでいた剣術では異国には敵わないことを悟り、幕臣であり、勘定吟味役格海防掛の江川太郎左衛門（1801～55年）にいち早く弟子入りし、西洋砲術を会得している。木戸は、1863年（文久3年）の「8月18日の政変」（公武合体派による尊王攘夷派の排除）、翌年の「蛤御門の変」（禁門の変）、第1次長州征討では身を隠していた。しかし、その後は長州に帰り、高杉とともに藩の海軍興隆用掛などの役職につき、西洋にも対抗できるような軍事力をつけることを目指して尽力した²³。

高杉は久坂とは対照的に攘夷に関しては慎重派であったといえる。高杉は1863年（文久3年）馬関（下関）での攘夷決行（四国連合艦隊下関砲撃事件）には参加しなかった。日本と諸外国の軍事力の差を把握してからであろう。高杉は1862年に2か月にわたって上海に視察にいった際、圧倒的な軍事力をもって諸外国に強いられている清国の国民の姿を目の当たりにした。彼がこの上海滞在によって学んだことは、青山忠正が言うように次のように整理できる。

「第一には何と云っても、西欧軍事力の優越性である。清国は国内の反乱軍に対してさえ、自力で鎮定できず、外国の兵力を借りるしかなかった。その軍事力は、いうまでもなく銃砲を装備した部隊である。清国兵もそれに模した洋式訓練を受け、かろうじて太平天国軍に対抗していたのだ。第二には清国が西欧諸国と貿易を強いられた結果、西欧に浸蝕されているという事態への認識である。上海港が繁盛しているように見えても、実際繁盛しているのは外国商館だけで、清国の人民が富み栄えているいわでなく、むしろマイナスを押し付けられているだけである。第三に以上のことを踏まえた攘夷論の成立である。高杉が考えた攘夷はすなわち夷国の制圧という意味がある。日本側が西欧諸国に対して、自主性を持った関係を築かない限り、清国と同じ轍を踏んでしまうというのである。その後の晋作の攘夷は、このような意味合いにおいて展開されるだろう。」²⁴

また高杉が太平天国軍の存在を知ったとき、奇兵隊の構想ができたのではないかと考えられる。長州藩は幕末において和製の武器よりも性能が優れた洋式の武器を長崎の T.B. グラバー（1838～1911年）などを通して買い揃えた。また藩の兵制改革は洋学者・軍政家の大村益次郎（1824

²² 永原『岩波 日本史辞典』p. 51, 339, 946 参照。その他、本論文では、年代・事実の確認は本書で行った。

²³ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 84 参照。

²⁴ 青山『高杉晋作と奇兵隊』p. 86-87。

～1869年)を中心に進められ、大村は農商兵の組織化を進めていった²⁵。

第2節 討幕運動

ここでは討幕運動、特に高杉晋作と奇兵隊について考えていく。1853年(嘉永6年)に黒船が来航し同年に日米和親条約、続いて1858年(安政5年)に日米修好通商条約を結び、外圧に押されている幕府をみて、尊王攘夷運動とともに討幕運動も活発化した。そんな中、長州藩では幕府に従おうとする俗論派と尊王攘夷を推し進めようとする正義派とに分かれていた。奇兵隊は高杉によって、外圧から藩を守るという目的で1863年(文久2年)に結成された。「奇兵隊は一面では藩主公認ではあったものの、その軍事力としての編成原理は総奉行の指揮する家臣団の「正兵」に対する、まさに「奇兵」としての存在にほかならなかった。奇兵隊は「正統」に対する「異端」の軍事力であった。」²⁶

奇兵隊は武士階級のみならず、農民・商人も入隊し、彼ら隊員も規定は諸隊の論旨によって定められた。この論旨は7か条で構成されており、礼儀を重んじているタテの要素と農民に対するきめ細かい配慮に重きをおいたヨコの要素とがある。全体としては圧倒的にヨコの要素の比重のほうが大きいものであり、その後も再確認され、奇兵隊のあるべき原点とされた。

その後、奇兵隊は民心を獲得していき、正義派も俗論派を押しつけ、「武備恭順」の方針を定めた。諸隊の求めていた方針が藩是になったのである。正義派はこのとき討幕派となり、藩の権力を握ることになった。討幕派は、攘夷よりも開国を、幕府との妥協よりも武力決戦を目指した。しかしこれによって完全に奇兵化していた奇兵隊ならびに諸隊は討幕派藩権力に完全に組み入れられ、正兵としての要素も帯びることになった。その後第2次長州征討では幕府に勝利し、戊辰戦争へと発展していくが奇兵隊は各々の戦いにおいて先陣をきって戦った²⁷。

長州藩は松陰の尊王攘夷思想の影響を強く受け継いだため、一時は四国連合艦隊による攻撃、禁門の変など、絶体絶命の危機に追い込まれたが、欧米の武器などを取り入れた軍制改革をしたことによってその危機を乗り越えることができ、討幕も果し得たといえる。この欧米の技術を進んで取り入れるというのも兵学者としての松陰の見解であった。また武士だけでなく農民、商人も導入した軍隊も作るという発想も松陰のものである。実際諸隊においても農民、商人はもちろんのこと被差別民による部隊もあった。こういった面においても松陰の思想は引き継がれているといえる。明治政府になってからも松下村塾で松陰から学んでおり、また奇兵隊にも属していた伊藤博文、山県有朋らが欧米の進んだ技術を取り入れていった²⁸。

なお、補足として、奇兵隊(諸隊)の別の側面すなわちその内部反乱について見ていくとともに

²⁵ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 79-80 参照。

²⁶ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 21。

²⁷ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 61-62 参照。

²⁸ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 112-113 参照。

に、そこで反乱の側に立った富永有隣、それを弾圧した木戸という松陰の弟子間での相違について考察したい。この脱隊騒動は、戊辰戦争で働いた長州藩の武士が凱旋してみると論功行賞にありつけるところか侍たちを養う力も藩には残っていなかったことが発端で、起こった。この反乱は明治2（1869）年の終わりから3（1870）年の初めにかけて起こりそのピークは1月20日前後である。藩知事の館のまわりを兵器を携えた反乱軍がとり囲んだ。さらに食物を絶ち、一時は木戸の生命も危機にさらされた。しかしここまでの一触即発のところまではいったが藩主に対する強訴の段階から抜け出ることができず、貴重な時期をみすみす逃してしまった。もしこのとき反乱軍が藩主への忠誠心を捨て、団結して藩権力を奪いにいったなら、それは可能であっただろう。

有隣はこの騒動において反乱軍側の首魁のなかのひとりになり、一方この反乱軍への厳しい処罰を下したのは木戸である。木戸が当初は反乱に対して平和的鎮圧論者であったことは注目に値するが、彼は明治の政治家特有の絶対主義的思想を持っていたため、この反乱の危機を即座に察知するとすぐ諸隊討伐論者になり、討伐に向けて対応をはじめた。2人はこのときもうすでに全く別の方向を向いている。この諸隊の反乱は諸隊の下級武士によってなされたものである。この点において富永は松陰の思想である志あるものが世の中を変えていこうとするという意味の「草莽崛起」を実践したともいえるのではないか²⁹。

有隣は学問においては松陰も認めるほど優秀であり、山県太華にも師事していた。松陰もそんな有隣に対して兄弟子のように接していたという。しかし彼は狷介な性格のために獄中生活を送ることになり、松下村塾においても、学力向上の面では貢献したがやはり塾生からも煙たがられる存在であった。松陰の再入獄の際は1か月もたたないうちに松下村塾を脱走し、自分は松陰とは違うと松陰の陰口をたたいていたともいわれていたことから松陰自体を敬っていたわけではないと考えられる。しかし、行動面において有隣は松陰の思想を受け継いでいる。実際彼は反乱後捕縛され、獄中にいたときも松陰のように同囚に学問を教えたといわれている。また松陰と関係があったこともあり反乱軍の首魁に担ぎ上げられたこと、処罰により多くの処刑者が出る中、松陰の息がかかった有隣は釈放されたことなど結果的に影響を大きく受けている。

一方、木戸は明治政府が転覆するのを恐れたため、反乱軍への処分を厳しくしたのではないかと考えられる。反乱が起きたのは明治になって間もないころであり、明治の権力も固まっていなかった。重い処罰を下した木戸は残酷だとも考えられるが、政府が転覆し、再び内乱になり多くの血が流れることを考えればこの木戸の判断は妥当であったとも考えられる³⁰。

またもうひとつ考えたいのは、松陰がこの明治初期に生きていたらどちらの方についていたかということである。可能性として2つの選択肢が考えられる。一つは藩が諸隊の兵士に賞典禄を与えないことに対して憤慨し、諸隊側につく場合、もう一つは軍事的エネルギーを海外侵略に利用し

²⁹ 田中『高杉晋作と奇兵隊』p. 147; 原口『長州藩諸隊の叛乱』p. 297-299, 308-309 参照。

³⁰ 河上『幕末維新随想』p. 39, 41 参照。

野口『幕末明治不平士族ものがたり』p151, 194 参照。

ようとする場合である。前者は松陰の平等思想に基づくもの、後者は兵学者松陰として考えられる。

第2章 新政権形成期と維新後での木戸・伊藤・山県の業績とそこでの松陰思想の実現

第1節 木戸（1877年没）の業績と松陰思想の実現

1. 木戸の業績

木戸孝允の業績のひとつめは、大政奉還後の明治新政府の基本方針を定めたものを1868年（明治元年）3月に発布した五箇条の誓文である。これは維新の野望を最初に具現したものと見える³¹。この誓文は同年1月に由利公正³²が原案を書いたが、福岡孝悌³³が修正したものを3月に木戸がさらに手を加えた。原案は士族を中心とした民主的なものであったが、木戸はこれを斥け天皇専制の理念を強く吹き込んだ³⁴。

もうひとつ大きな業績は、版籍奉還・廃藩置県の一連の政策である。版籍奉還は1869年（明治2年）木戸と共に大久保、伊藤によって建議されたのであり、木戸は藩制度の解体に積極的であった。全ての大名に土地と人民を天皇に返上させることで強力な中央集権国家を作り上げようとし、続く廃藩置県を断行した。全国の藩は廃止され、県・府となり幕藩体制が解体され新たな新政府による体制が整った。木戸は天皇を中心に権力を集めることに積極的な姿勢をとり、以後続く明治政府の基盤を作った。「木戸のねらう明治政権の基本的な性格が、はっきり演出された」³⁵部分であり業績といえる。

2. 木戸の各業績に見られる松陰思想と実現

松陰の思想が現れているのはこれらの業績に当てはまることだが、特に出てくる部分は五箇条の誓文の民主的意図であった原文から天皇を中心とした草案へ改作した強硬な姿勢ではないだろうか。松陰の持っていた天皇統治による国家樹立の思想はここに反映されており、この誓文の改作により今後の中央集権国家に向けての制度を作るうえで大きな役割を果たしたといえる。吉田松陰にはもともと、天皇中心であってもモラル（武士の倫理）を持った人々同士は平等である、

³¹ 富成『木戸孝允』p. 153 参照。

³² 由利公正（1829～1909年）福井藩士。旧藩での富国政策の経験から殖産興業の必要性を痛感した。新政府の参与となり、財務を担当した。全国歴史教育研究協議会『日本史用語集』p. 227 参照。

³³ 福岡孝悌（1853～1919年）土佐藩士。薩土両藩の盟約に尽力。公議政体論を主張し、新政府の参与となる。全国歴史教育研究協議会『日本史用語集』p. 227 参照。

³⁴ 富成『木戸孝允』p. 155 参照。

³⁵ 富成『木戸孝允』p. 155。

という思想があった（序章第2節参照）。しかし、松陰の弟子木戸は、その思想のうち天皇中心だけを強調して、平等の方を切り捨てた、と言えるだろう。このことは、すでに見た、木戸が奇兵隊・諸隊の反乱において弾圧の側に回ったこととも関連する（第1章第2節参照）。彼は天皇の大権によって、強権的に日本をまとめようとしたのである。

第2節 伊藤博文の業績と松陰思想の実現

1. 伊藤の業績

伊藤博文は1841年（天保12年）周防国熊毛郡束荷村の農家の生まれで、利助と名付けられた。家が貧しかったため、12歳の時に伊藤家の養子となる。その後、江戸湾警備のため相模に派遣されるが、その時の上司であった来島良蔵（1829～62年）——のちに横浜の外国領事館襲撃を計画する攘夷主義者——の紹介により松下村塾へ入門した³⁶。

吉田松陰が外国密航や幕府批判のために処刑された後、伊藤は井上薫にイギリスへの渡航を熱心に誘われていた。伊藤はこのころ久坂玄瑞らと共に攘夷を実行する側の人間であったし、その行動を支えていたのは晩年に松陰がたどり着いた尊王攘夷に基づく討幕思想に他ならない。はじめは久坂に攘夷を行う他はないと説得されていた。

しかし、松陰が処刑された1859年から、イギリス渡航の希望を持っていた伊藤は1863年4月13日に井上に渡航の意思を伝えた。それが実行に移され、彼はイギリスのロンドンに到着すると、現地のイギリス人学生と交流すると共に、博物館や美術館などを訪れ、海軍の設備や造船所、その他の工場等を見学した。伊藤はイギリスの文明の進歩と国力が強大であるのに感服し、すぐに単純な攘夷の考えを捨てることになった。彼の渡航直後の、長州藩の過激な攘夷運動を数か月後の新聞の記事で知った伊藤は、井上と共に1864年3月にロンドンを再出発し、それを抑えるべく、決死の覚悟で帰国することになった³⁷。

その後1867年に徳川慶喜によって大政奉還が実現し、明治維新が完遂すると、翌年1868年5月23日に初代の兵庫県知事に任命される。1870年にはアメリカに留学し、1871年5月に日本で初めての貨幣法である新貨条約が制定された。この新貨条約に金本位制を導入したのは伊藤自身の西洋文明へのあこがれが大きい³⁸。

伊藤の業績として韓国併合は欠かせない。伊藤は1905年に64歳で初代韓国統監になり、韓国人の積極的な支持を得て韓国の近代化をできる限りやすいコストで行おうとした。伊藤は併合を行うことで日露関係が悪化し、他の列強諸国からの支持も得られなくなれば日本の軍事費や韓国統治が不安定になり、日本の発展が阻害されると予想していたため、当初「併合」

³⁶春畝公追頌会『伊藤博文伝』p. 1 参照。

³⁷伊藤『伊藤博文』p. 44-48 参照。

³⁸灘井『伊藤博文』p. 21-23 参照。

することは考えてはいなかった³⁹。

2. 伊藤博文の各業績に見られる松陰思想

伊藤は当初、父十蔵が破産という困難を努力で乗り越えたという事実を見て、努力をすれば何とかなると楽天的な人生観をもっており、伊藤が政治家として大成していくのにあたり、この人生観は大きな財産となった⁴⁰。

伊藤は松陰から、既存の体制を否定し、藩主や天皇という絶対的なものを設定することの必要性を学んだ。イギリス渡航の後に単純な攘夷の思想を捨てたが、松陰が藩主への——またそれを経て天皇への——絶対的な忠誠の論理を見出したのと同様、伊藤は天皇を忠誠の対象として明治から廃藩置県を主張し、国民参加型の立憲国家の形成を目指した⁴¹。

松陰が亡くなった直後の伊藤は、尊王攘夷に基づく討幕思想を持った人間であった。しかし、伊藤と松陰はそれぞれ異なる気質を持っていたと考えられる。伊藤は過激な精神主義者の松陰より、冷静に日本の行く末を熟慮し、行動していた長井雅楽に共感を示していたとされている。伊藤は松陰のような精神論的言動を一貫して忌避する一方で、自らの政治理念を確立しつつ、政治の世界における諸勢力の利害調整に腐心した人間であった⁴²。

しかし、イギリス渡航を経験した伊藤が欧米諸国の民主主義に共感していたことは確かだが、彼が松陰の平等主義を持ち続けた可能性、すなわち松陰のそれをベースとして欧米民主主義を受容した可能性がないだろうか。また、欧米列強の文明力に感銘を受けて単純な攘夷の考えを変えたとはいえ、いずれは日本も発展して欧米諸列強に対抗していくべきであるという考えを有していたのであれば、彼の心の中で——形を変えてであるが——松陰の攘夷思想が密かに維持されていた可能性がある。そうだとすると伊藤も単純に松陰思想から脱したわけではないのである。これらの可能性については、本論文での考察の範囲を超えているとはいえ、さらに探求するに値する。

第3節 山県有朋の業績と松陰思想の実現

1. 山県有朋の業績

山県有朋は 1838 年、萩城下近郊の阿武郡川島（現在の山口県萩市川島）に長州藩の中間（武士階級における最下級に相当）、山県有稔の長男として生まれた。久坂玄瑞の紹介で松下村塾に入門し、後に奇兵隊の軍監となった⁴³。山県有朋は実直な性格ゆえに、同僚の高杉晋作や、他藩の西郷隆盛と親交があったとされるが、1877 年に勃発した西南戦争において西郷隆

³⁹伊藤『伊藤博文をめぐる日韓関係』p. 43-45 参照。

⁴⁰伊藤『伊藤博文』p. 33 参照。

⁴¹伊藤『伊藤博文』p. 39-41 参照。

⁴²灘井『伊藤博文』p. 5-7 参照。

⁴³松下『徴兵令制定史』p. 37 参照。

盛と対峙することになった⁴⁴。明治維新後は内閣総理大臣を二回経験し、韓国併合や日清戦争、日露戦争などに関与したされる。韓国併合においては、伊藤が安重根に暗殺されると山県は伊藤が危惧した強硬な統治を行い、韓国併合を完遂した⁴⁵。山県は結果としてほとんどの国民から理解されず、1922年2月1日に眠るように亡くなった⁴⁶。

2. 山県有朋の業績に見られる松陰思想

若くして渡航した伊藤や井上らとは異なり、軍事を重んじた山県は外国の文明を体験する機会がなかったためか、明治維新以降も兵学者松陰からの影響を他の弟子たちよりも体現し、攘夷の思想を持ち続けた。松陰思想の一つに「ことが成就するか否かを考えるより、可能性を考えずに自らが正義と思うところを命がけで実行する」というものがあるが、伊藤から渡航した経験を聞いた後も、山県はこの思想を持ち続けたと考えられる⁴⁷。松陰が提唱した、天皇中心の「国体」(=日本)という考えを、そうした武士道的な意味で一番体現していたのは、山県ではないだろうか。ただし、軍事的統率への志向が強い山県が松陰の平等思想をどれだけ受容したかは、疑問である。

結 論 松陰思想の何が実現されたのか？ その成果と危険性は？

序章で述べたように、松陰の思想の主要な部分は「天皇中心の日本という観念による西欧列強への対決」(第1節)、「天皇の下での平等という観念をベースにした革命的な倒幕運動の思想」(第2節)、「軍事・兵器を中心とした、欧米の優れた技術の移入」(第3節)というものである。

松陰の松下村塾で学びを受けた木戸・山県・高杉・久坂・富永・伊藤らはその思想を少なからず受け継ぎ実現していた。しかし、その中でもそれぞれの実現の仕方や内容には違いがあった。

例えば、木戸孝允は松陰の思想の「天皇中心」という部分を強調し中央集権国家を作ろうとしたが、人々の平等という点に関しては軽視していた部分がある。高杉晋作・久坂玄瑞は尊王攘夷運動を進め、ともに1862年(文久2年)のイギリス公使館焼討に携わった。しかし、それ以前に上海で太平天国の乱を見て危機感を強めていた高杉は、その後1863年(文久3年)に四国連合艦隊下関砲撃事件の和議に携わるとともに、平等主義による奇兵隊を組織する。他方、日本を出ることのなかったいわば純粋な久坂は、1864年(元治1年)の「蛤御門の変」で自刃・早逝するのみである。

伊藤博文は海外の優れた技術を学ぶために実際に英国密航を行い、多くの知識と経験を持ち帰った。そして天皇を絶対的な存在・忠誠の対象とし、かつ欧米の国民参加型の憲政をも採り入れ

⁴⁴ 伊藤『山県有朋』p. 135-137 参照。

⁴⁵ 伊藤『伊藤博文をめぐる日韓関係』p. 43-45 参照。

⁴⁶ 伊藤『山県有朋』p. 456 参照。

⁴⁷ 伊藤『山県有朋』p. 39-41 参照。

た国家の在り方や制度を作ろうと尽力した。伊藤は松陰に比べるとより冷静に物事を捉える傾向にあり、国家の現状を考えながら行動に移してきた部分がある。とはいえ、伊藤の欧米型の国民参加型の体制を目指したベースには松陰の平等思想があったと言えるかもしれないし、また新政府の要職に伊藤があつた中で列強のひとつであるロシアとの戦い（日露戦争）に実際に勝利したことからすれば、伊藤には形を変えた松陰の攘夷思想も——天皇中心思想に加えて——あつたのではないとも言える。

軍事を重んじた山県有朋は松陰の兵学者としての思想、攘夷の思想を受け継ぎ、天皇中心の日本の在り方というものを体現した。その意味で山県は、伊藤のようなスマートさのない、武骨な松陰主義者であつたと言えよう。

このように松下村塾で松陰の教えを受けた弟子である彼らの中には、松陰亡き後もその思想は受け継がれ、差異はありながらも確実に体現されていたのである。その中でも特に攘夷思想とともに、外国の優れた技術を積極的に学び取り入れようという姿勢は強く引き継がれ体現されていた部分であつたと言える。また、伊藤・木戸においては天皇を中心とするという松陰思想は共通している点である。

実際に幕府が倒されて、天皇中心の明治政府が形成され、そこには天皇の下での——いづらか平等の要素（士農工商の廃止）も含まれた——国民の政治参加が実現したし、また「攘夷」の課題は性急には実現しなかったが1905年のロシアへの勝利は広義での——遅まきながらの——「攘夷」の成就と言える。しかもその勝利は、富国強兵のプロセスの中で欧米式の軍事力の増強によって可能だったから、松陰思想の「軍事・兵器を中心とした、欧米の優れた技術の移入」という要素が追求されて攘夷が実現されたことになる。このように考えると、松陰の思想は、弟子たちの尽力によって、その3要素とも現実化されたと言える。松陰の思想はこのように、弟子たちを通じて大きな成果をわが国にもたらした。まさに、ツールよりも思想が先導した大きな変革であつた。

ただし、彼の思想の強い影響力は、ときに過激すぎる運動や行動にもつながつたのであり、危険性とも隣り合わせだった。

危険性の第1は、その平等主義に由来する既存支配体制の革命的転覆である。平等主義的な奇兵隊・諸隊が討幕に重要な役割を果たしたことは言うまでもないが、彼らは、新政府が自分たちの利益をないがしろにしたとき、それに対しても徹底抗戦した。松陰の影響を受けた富永有隣がその反乱を支持したことは思想史的に興味深いし、また維新後の新政府がその問題への対処にてこずつたことは歴史的に注目し得る（第1章第2節参照）。ただし、松陰思想のこうした側面は国家の転覆としての危険性を有するが、全体として、理不尽な体制を倒す革命としてポジティブに捉えるべきであろう。

危険性の第2として、天皇中心の「国体」としての日本の優位を強調した松陰の思想とその帰結が周辺諸国に及ぼした危険性を挙げるべきである。もともと普遍的で中国にも日本にも当ては

まる孟子の諸原理を学びながらも、天皇中心のわが国の「国体」を特別視して、孟子を改編して自らの思想を形作ったのが、松陰の境地であった。それに基づけば、アジアでのわが国が特別な地位をもつことになる。実際に「攘夷」としての日露戦争の勝利のあとにわが国が推し進めたのは朝鮮半島・中国大陸への端緒的な支配・植民地化であった。これがそれらの人々に多大な犠牲を及ぼした第二次世界大戦へと至るわが国の不幸なプロセスの始まりだとすると、松陰思想の「国体」主義は危険な側面をもっていたと言えるのである。

補論 幕末・明治維新期の女性たち

ここでは明治維新时期に時代を支えた3人の女性に注目し、彼女たちが何を求め、何を成したのか、そしてその根底にある精神はどのようなものなのかを探っていく。激動の日本近代を華麗に、そしてたくましく生き抜いた3人の女性を追うことで日本女性の底力や力強さを知っていききたい。

1. 幾松

幾松は京都三本木屋の芸妓であり、明治維新の立役者、木戸孝允を献身的に支えた女性として有名である。幾松（木戸松子）は1843年（天保14年）、若狭小浜藩・木崎市兵衛の娘として生まれた。9歳の時に京に移り、一条家諸大夫の難波常二郎の養女として幾松は舞子の修業に入った。幾松という名はこの時にもらったもので14歳のときに三本木「吉田屋」にて舞妓・幾松に襲名した。幾松は得意の笛と踊りで瞬く間に有名な芸妓へと成長した。

幾松が木戸と出会ったのはこの三本木屋である。彼女は「近代的な教育を受けた女性ではないが勤王思想という正義を重んじる志操と男性と、対等にわたりあえる知性を持った賢い女性であり、また勤王家の志を知る幾松は木戸にとって同志でもあった。」⁴⁸とされている。幾松は新選組から追われる木戸を、新選組の厳しい尋問にも動じずにかくまったり、また蛤御門の変で敗れたときには、今出川の東の掘立小屋に隠れた桂に握り飯を運ぶなど京で最も困難にあっていた桂を支援し、尊王攘夷活動の手助けをしたのだった。結果として幾松のこうした行動は新選組や会津藩からの監視の対象となってしまうが、自らを犠牲にしてまで、木戸を支えたのは、木戸を助けることは間接的に日本の未来を動かすことになることを悟っていたからではないだろうか⁴⁹。

2. 広岡浅子

明治から大正にかけての激動の時代にあたって、学ぶこととカネを儲けることを見事に両立させた人物がいた。日本近代屈指の実業家にして教育者だった女傑、広岡浅子である。広岡浅子は1849年（嘉永2年）、山城国京都（現・京都府京都市）・油小路通出水の小石川三井家六代当主・三井高益の四女として生まれた。17歳のとき、鴻池善右衛門と並ぶ大坂の豪商であった加島屋の

⁴⁸ 高橋「<木戸孝允>を支えた女」p.91。

⁴⁹ 高橋「<木戸孝允>を支えた女」p.91-92 参照。

第8代広岡久右衛門正饒の次男、広岡信五郎と結婚。この結婚が彼女にとって大きな転機となった⁵⁰。

浅子は近代日本発展の原動力ともいえるエネルギーの「石炭採掘事業」にいち早く乗り出し、大きな成功を収めた。さらにそののち、新しい金融システムに注目し銀行を設立。加えて生命保険事業にまで参入し、朝日生命を設立した。実業家として活躍した一方で、彼女は教育者としての側面も持つ。女子というだけで思うように学問ができなかったという幼少期の経験、そして女性でも教育を受ければ表の世界で活躍できるという自らの経験から、女子教育の必要性を生涯にわたって訴え続けたのだった⁵¹。

彼女には「実業家・教育者」という2つの顔を持っており、そのいずれもが、後世の私たちにとって多くの教訓と示唆を与えてくれるものである。一見この2つの顔は全く無関係のように感じるが、そこには浅子の共通する精神があった。それは「公共の精神」である。事業においても、教育者としても、自分の欲求を満たすためではなく、世のため、人のために奔走した浅子。常に時代の流れを見極め、今の世のなかに、そして人々に必要なものを探し求めて走り続けた。「人は、世のため人のために生きてこそ人である」⁵²といった私利私欲を完全に捨てた浅子の精神が多くの人を突き動かし、近代日本形成に大きな貢献をもたらしたのだった⁵³。

3. 津田梅子

「知性と性格の力を備え、自分で思考できる女性」を育てることを理念にかかげて、女性の解放を目指し、女性の地位向上と女子教育の発展に尽力した津田梅子。その原動力はいったいどこから来るものであったのだろうか。

津田梅子は1864年（元治元年）に、幕臣であった津田仙の次女として、江戸の牛込南御徒町（現在の東京都新宿区南町）に生まれた。アメリカに留学経験があった父・仙の強い希望から、梅子は6歳のときに岩倉使節団の一員として渡米。この留学は彼女の後の人生に大きな影響を及ぼすこととなった。

1871年（明治4年）12月末、4年を数えたばかりの新生日本が、その力を試すべく欧米各国に使節団を送り出した。翌72年に通商条約の改定を控え、日本は治外法権の条項を撤廃させ、諸国と対等の地位を得ようとしていたのである。しかし条約改定交渉を表立って触れるわけにはいかなかったため、表向きの目的として「学習する一大集団」を各国に派遣したのだった。その使節団に同行する士族・学生合わせて107名に及ぶ男性ばかりの「学習する一大集団」の中に、付け足したように5人の少女が加わっていた。北海道開拓使が募集した日本で最初の女子留学生であり、その中の一人に、のちに女子教育に尽力することとなる、津田梅子の姿があった。梅子は

⁵⁰ 長尾『広岡浅子』p. 36-66 参照。

⁵¹ 長尾『広岡浅子』p. 87-190 参照。

⁵² 長尾『広岡浅子』p. 77。

⁵³ 長尾『広岡浅子』p. 77-78 参照。

アメリカ到着後、ワシントン郊外のランマン家に預けられ、文学、美術の薫陶とピューリタンの気風の中で育ち、多くの教養を身に付けた。堅実なキリスト教徒の家庭に11年起居し、一級の学校に学び、学校の外で広い教養を身に付け社会奉仕を目の当たりにして育った梅子は、「近代的女性」の模範というべき存在にまで成長し、18歳で帰国。しかしそんな梅子を迎えたのは、男尊女卑が根強く残る、ステレオタイプの日本の姿であった⁵⁴。

そのような日本の在り方に失望し、途方に暮れる日々を送っていた梅子であったが、そんな彼女を突き動かしたのは使命感とアメリカでの体験であった。それらはいったいどのようなもので、彼女にどのような影響を与えたのだろうか。

まず1つ目に留学中、ピューリタンの家庭で育った梅子にとって勤勉は当然のことであり、その過程で何か役立つことをしていなければ気が済まない性格が形成されたということが挙げられる⁵⁵。留学中、常に優秀な成績を修め、多くの人と積極的にかかわり、教養を身に付けてきた梅子であったが、その根底にあるのは、この体験を日本に持ち帰って役立てなければならないという使命感であったはずだ。だからこそ、それを妥協することは、自分の努力を否定することのように感じられ、梅子はチャンスを求めて動き続けたのだ。

2つめは政府が出してくれた学資を仕事を通して返さなくてはならないという義務感である⁵⁶。岩倉使節団の留学は、留学生自身の経験や学力向上を目的としたものではなく、他国の進んだ文化を吸収し、最終的には国の発展のために役立てるという明治政府の大きな挑戦であった。帰国したら終わりでない、ここから勝負だということを人一倍理解していた梅子だからこそ、仕事に対して妥協を許さなかったのだろう。

そして3つめは仕事は、梅子が求める自由であったということだ⁵⁷。仕事を通して精神的にも、経済的にも、1人の女性として自立することは梅子の求める自由でもあったのだ。

こうした3つの原動力により、困難な状況に何度も立ち向かいながら、念願であった「知性と性格の力を備え、自分で思考できる女性」を育てるべく、女子英学塾を設立し、日本の女子教育の在り方に大きな影響を与えた。頑なまでに一本の道を貫いた梅子によって、一個の人間として立てる女性という新しい種が広められたのである⁵⁸。

まとめ

以上のことから3人の女性は対照的なタイプであるということが分かる。幾松は家に入り、後に夫となる木戸を支えた。広岡は結婚と仕事を両立させ、そして津田は結婚せず、仕事に打ち込んだ。現代でも女性と仕事については様々な議論がなされているが、この問題はすでに明治時

⁵⁴ 古木『津田梅子』p. 7-60 参照。

⁵⁵ 古木『津田梅子』p. 77 参照。

⁵⁶ 古木『津田梅子』p. 77 参照。

⁵⁷ 古木『津田梅子』p. 77 参照。

⁵⁸ 古木『津田梅子』p. 210 参照。

代から始まっていたようだ。

このような側面から見れば対照的な3人ではあるが、それぞれの生活スタイルを選んだ根底にあるのは「世のため、人のため」に自分の持っている力を尽くすという公共心であり、この部分においては共通している。これは現代の女性たちにも通じるところがあるのではないだろうか。女性と仕事のあり方について、正解や間違いは存在しない。専業主婦は、家に帰ってくる家族のために、仕事と家事を両立している女性は、家族と社会のために、そして仕事一筋で頑張る女性は今の社会、そして未来の社会のために、汗を流している。全く違うように見えても、女性たちの根底にあるのは公共心なのだ。いつの時代も女性は男性に引けを取らないほど、誰かのため、何かのために力を尽くしている。

< 参考文献 >

青山忠正『高杉晋作と奇兵隊』吉川弘文館、2007年。

伊藤之雄『伊藤博文をめぐる日韓関係——韓国統治の夢と挫折、1905～1921』ミネルヴァ書房、2011年。

伊藤之雄『伊藤博文——近代日本を創った男』講談社、2015年

伊藤之雄『山県有朋——愚直な権力者の生涯』文藝春秋、2009年

稲生典太郎『東アジアにおける不平等条約体制と近代日本』岩田書院、1995年。

勝田正治『廃藩置県』講談社、2000年。

河上徹太郎『幕末維新随想』河出書房新社、2002年。

北影雄幸『吉田松陰の主著を読む』勉誠出版、2014年。

坂野潤治『明治憲法体制の確立——富国強兵と民力休養』東京大学出版会、1971年。

全国歴史教育研究協議会『日本史用語集』山川出版社、2014年。

瀧井一博『伊藤博文知の政治家』中公新書、2010年。

高橋小百合「<木戸孝允>を支えた女——幾松の「維新」と「復古」、北海道大学大学院文学研究科『研究論集』第16号、2016年。

高橋文博『吉田松陰』清水書院、1998年。

田中彰『高杉晋作と奇兵隊』岩波書店、1985年。

富成博『木戸孝允』三一書房、1972年。

長尾剛『広岡浅子——気高き生涯』PHP文庫、2015年。

永原慶二（監修）『岩波 日本史辞典』岩波書店、1999年。

野口武彦『幕末明治——不平士族ものがたり』草思文庫、2018年。

古木宣志子『津田梅子』清水書院、1992年。

松下芳男『徴兵令制定史』五月書房、1984年。

松本三之助編『日本の名著』31 (=『吉田松陰』)、中央公論社、1973年。

吉田松陰「將久私言」(1853年(嘉永6年))、山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第2巻、大和書房、1973年。

——「討賊始末」(1857年(安政4年))、山口県教育委員会編『吉田松陰全集』第4巻、大和書房、1972年。

(以下初歩的なものとして)

岩田やすてる(季武嘉也監修)『学習まんが人物館 伊藤博文』小学館、2017年。

梅屋敷ミタ・三上三平(河合敦監修)『学習まんが世界の伝記NEXT 木戸孝允と高杉晋作』集英社、2017年。

大谷じろう(原口泉監修)『学習まんが人物館 広岡浅子』小学館、2017年。

みやぞえ郁雄・菅谷淳夫(津田塾大学津田梅子資料館監修)『学習まんが人物館 津田梅子』小学館、1997年。

NHK(DVD)『その時歴史が動いた「志ある者よ立ち上がれ」——獄中の出会いが生んだ吉田松陰の思想』NHK、2003年。

NHK(DVD)『蒼天の夢——松陰と晋作・新世紀への挑戦』NHK、2008年。